

## 関西学院大学 経済学部

訪問調査対象 プログラム名	フィールド調査から学ぶ開発経済学と途上国ビジネス
類 型	専門研究型・共同 PBL 型・フィールドワーク型・キャリア開発型×必修型（ゼミ）

### A. 海外プログラムの詳細

#### 【要旨】

- 開発経済学ゼミ 3 年生が参加し、アフリカ・マダガスカルで 1 カ月の現地調査を実施し、その後、連続して 1 カ月間インドネシア・バリ島での観光開発に関するインターンシップに取り組む（2019 年度）。
- 現地調査は開発経済学、行動経済学、計量経済学などの専門的知見を駆使したもので、膨大な質量の事前学習が必須となっており、かつ事後学習として修士論文レベルの論文執筆に取り組むことが求められている。
- 現地調査の結果は、現地の政府機関などに向けてプレゼンテーションを行っており、実際に政策に活かされている。
- 本プログラムに必要な英語能力は TOEIC700 点程度だが、プログラム開始前には 450～500 点程度の学生もおり、学生たちは本プログラム参加のために強い目的意識を持って英語力を必要なレベルにまで自力で向上させている。
- 現地調査とインターンシップを長期にわたり連続させることで、学生に消化しきれないほどの経験をさせること、殻を破る経験を積ませることも狙いとしている。

#### （1）教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

##### **全学・学部あるいは学科での DP あるいは教育目標との対応関係が明確である**

本プログラムは「アフリカ研究」（現地調査）とバリ島（インドネシア）での「アジア地域の観光開発」（インターンシップ）で構成されている。参加するのは開発経済学のゼミに所属する 3 年生全員（2019 年度からはゼミ所属学生以外も可、結果的にゼミ生のみ）の参加である。

関西学院大学では、「“Mastery for Service”（隣人・社会・世界に使えるために自らを鍛える）を体現する世界市民」の育成を人材育成理念としているが、本プログラムはこれを念頭に、国際的な視野と、高度な能力を有したグローバル人材（主に海外で活躍できる人材）を育成することを目的としている。そのために、①徹底した学力の向上（分析的な能力と教養能力の双方）、②世界のリアリティに触れる現場意識の養成、③他者理解能力の養成の 3 つの目標が設定されている。そして、それぞれの科目の目的として以下が掲げられている。

#### （アフリカ研究）

本プログラムで行われる社会経済調査、現地学生との交流を通じて、未だに多くの人が絶対

的な貧困に苦しむアフリカの持続可能な発展に貢献する人材の育成をめざしている。

(アジア地域の観光開発)

本プログラムで行われるインターンシップや観光客調査、現地学生との交流を通じて、バリ島の持続可能な発展と観光開発に貢献することをめざしている。

本プログラムには、これらの目的・目標だけでなく、担当する教員の狙いも込められている。それは、敢えて学生たちに消化しきれない経験をさせることである。これが2つの科目を連続して実施している理由でもある。

近年の学生には、チャレンジする意欲はあっても表面に出せない傾向があり、それが年々強まっているという認識のもとに、学生が本来持っている情熱を開花させるためにも、路頭に迷うことを辞さず過酷な環境に投げ込む。そして過酷だからこそ、学生は真剣に準備するということである。こうした経験を若いときに積むことが、本プログラムの隠された狙いとなっている。

## 2. 海外プログラムの実施状況とその内容

**教養や英語スキルの修得にかかわる主目的のプログラムに加え、現地の学生や人々とのコミュニケーションにかかわるプログラムが明示されている**

【実施時期】 7月末～9月末

【実施期間】 2カ月間

【実施場所】 前半1カ月アフリカ・マダガスカル 後半1カ月インドネシア・バリ島

※上記は2019年度。2018年度はアフリカ・セネガルとインドネシア・バリ島。

【参加学生数】 25人程度

【プログラムの具体的活動内容】

(現地調査：アフリカ・マダガスカル研究)

最初の1カ月間はアフリカ・マダガスカルに派遣され、そこで開発経済学の知見に基づく現地調査を実施する。

マダガスカルの言語は、地方はすべてマダガスカル語で、都市では旧宗主国のフランス語、一部では英語が通じる。調査には現地のアンタナナリヴ大学の学生が通訳兼助手として23人同行する(派遣学生1人に対して1人)。まず、彼らと英語で調査目的および内容を共有するために丸1日を費やす。事前にテーマに沿って準備してきた英語での調査票(30～40ページ)をアンタナナリヴ大学の学生に英語で説明するが、これは現地の英語に慣れるためのウォーミングアップも兼ねている。

その後、調査地に向かうための買い出しなどの準備に1～2日をかけ、調査する村に向かう。調査対象地では、ホテルやホームステイが組み合わされている(2018年度のセネガルでは村民宅にホームステイ)。ホームステイは業者や担当教員が手配するのではなく、調査する村で村民に直接調査への協力を依頼し、泊めてもらえるように通訳を介して交渉する。

テーマはチームごとに設定されているが、例えば「マダガスカル人は利他的行為が苦手な国民と言われているが、彼らの利他性・公共性を測定して、農業プログラムへの熱意にどう影響するかを調べる」「ジェンダー格差が子どもの教育投資や健康にどう影響するか」「家族の喪失等のショックが家計の脆弱性にどう影響するか」など、いずれもゲーム理論や行動経済学的視点が求められる調査となっている。2019年度は期間中3つの村への調査を行った。

現地の村ではインターネット環境はなく、電気も通じていない場合も多いため、記録はすべて紙への手書きとなる。期間いっぱい調査し、首都アンタナナリヴに戻って2~3日で急いでデータをまとめて、調査結果をJICAやマダガスカル政府機関に対してプレゼンテーションする。2019年度はその発表が国営放送でも紹介された。調査結果が実際に現地政府の政策に活用されていることも、本プログラムの大きな特徴となっている。

(タイ・バンコクでの1日のプログラム)

アフリカ・マダガスカルでの現地調査終了後、1日だけバンコクに立ち寄るプログラムが組まれている。関西学院大学経済学部と協定を結ぶ現地のトップクラスの大学であるチュラロンコン大学の学生と協働プログラムに取り組む。関西学院大学の学生は現地学生とペアで屋台に赴き、2人で1分間のプロモーション動画を3時間程度かけて作成する。

このプログラムを現地調査とインターンシップとの間に挟む理由は、最貧国であるマダガスカルとタイ・バンコクとの経済の格差や文化の違いを、学生に体感させることにある。2国間の経済格差同様、チュラロンコン大学はアンタナナリヴ大学(マダガスカル)に比して極めて研究や教育のレベルが高く英語力もハイレベルであるなど、この格差についてある種の「やりきれなさ」を学生たちに感じてもらい、開発経済学に取り組むマインドを養成しようという狙いである。

(インターンシップ：インドネシア・バリ島)

学生は2人1組を基本にバリ島の企業や大学に派遣される。このプログラムが一般的なインターンシップと異なる点は、大学側が派遣先を決めるものの、それ以上のお膳立てをせず、学生に主体的にかかわらせる点である。例えば、自分の力が発揮できる仕事を担当させてもらえなかった場合、学生は自分で企業と交渉してやりたい仕事を任せてもらえるようにする。派遣先は、日本人向けフリーペーパー作成企業、ホテル、日本語学校などである。

インターンシップ期間中に、学生は現地のウダヤナ大学日本語学科の学生と協働してビーチクリーン活動や現地の観光に関する調査に取り組む。ビーチクリーン活動は、2018年度の参加者は現地の人々や観光客60人程度であったが、2019年度には広報活動を強化して300人を超える参加があった。観光調査は、1000人を超える観光客のデータを集めて分析し、ウダヤナ大学の学生と共同分析してプレゼンテーションを行う。これは現地学生にとっても大きな学修経験となっている。また期間中、学生はその日にあったことや考えたことを1,200字の日報にまとめ、メールで担当教員に報告することになっている。なお、インタ

ンシップ期間中は担当教員は帰国しており、活動の内容に関する問題があっても、基本的にはすべて学生が自分たちで解決することになっている。

### 3. 事前・事後学習およびカリキュラム全体との関連

**全学・学部・学科のカリキュラムと連携している**

**現地での学修に関連する事前学習のコンテンツが潤沢に用意されている**

**現地での学修に関する事後学習のコンテンツが潤沢に用意されている**

本海外プログラムでは、参加する前提として、「ミクロ経済学」「マクロ経済学」「計量経済学」「開発経済学」「中級開発経済学」「ミクロ経済学とその応用 A」「経済学のための統計学入門 A・B」などを履修することを通じて、ミクロ・マクロ経済学の基礎から中級の知識、開発経済学、行動経済学および統計学の知識を備えていることを求めている。正式なゼミ所属は 2 年次秋学期だが、ゼミ募集が始まって 5 月に所属ゼミが決定すると、開発経済学ゼミへの所属が決まった 2 年生は、すぐにゼミ活動に参加し、本プログラムの準備に入る。2 年生は、統計学の理論的なことはすでに専門科目で学んでいるが、実際のデータを用い統計ソフト (STATA) を活用する作業には慣れていないので、ゼミでそれをトレーニングする。

マダガスカルやバリ島は日本とは文化背景が大きく異なり、論理や私たちが持つ常識だけでは割り切れない経験をすることも多い。こうした現実の理解や受容の仕方を考えさせることを目的として、学生には経済学だけでなく異文化理解などを扱ったものも含めて 60-70 の本や論文を読ませ、感想や意見をレポートに書かせた上でディスカッションもさせている。この事前学習は、渡航先での行動やものの見方に大きなプラスの効果を与えている。

こうした事前学習に加えて、学生はプログラムの本筋である現地調査に向けた準備を進める。まず、先行研究のレビューとして 1 チーム (4~5 人) で 100 本程度の英語論文を読み、チームの研究テーマを確定させる。次にその研究に必要な英文の調査票を作成する (たいてい 30~40 ページの調査票になる)。こうした事前準備は、3 年生の春学期となると、ほぼ毎日終電前後まで続けられ、質・量ともに大学院生が行う研究と比べても遜色ないレベルとなっている。

現地調査やインターンシップに必要な英語力は TOEIC スコア 700 程度であるが、ゼミとしては特別な講座やプログラムは提供していない。プログラム参加前には、現地で求められる英語レベルに達していない学生が大半であるが、現地での活動に向けて、学生は各自で懸命に英語学習に取り組み、かつては自分たちも同様であったゼミの先輩たちも積極的にそれを助けたりアドバイスを与えたりしている。学習方法としては、最近ではフィリピン・セブ島とのスカイプによるオンライン英会話などで学んでいる学生が多いようである。

また、渡航時期は就職活動の開始時期に重なるため、学生は早めに単位を取得して、このプログラムに参加できるように準備をしている。

事後学習は、調査結果を論文にまとめることに尽きる。帰国後 1 カ月ほどで現地で収集した膨大な調査データを分析しチームで論文にまとめ、外部の論文コンテスト (ISFJ、

WEST、JJ 政策フォーラム等)で毎年発表している(発表時間は15~20分程度)。この論文の作成過程も毎日、終電近い時刻までゼミ室に詰めて取り組むというもので、完成する論文の質は修士論文レベルに達しているであろう。

#### 4. 効果測定・アセスメント、カリキュラムマネジメント

**全学、学部あるいは学科での DP や教育目標、あるいは海外プログラム個別の教育目標に対応させた形で、海外プログラムの成果を多面的に評価する仕組みがある**

本プログラムの最大のアセスメント対象は、実際に書かれる論文のクオリティであるが、事前学習、渡航先での活動状況や調査の進捗、事後学習のすべてにわたって担当教員によって緻密にモニターされている。また、論文執筆後にはプログラム参加者全てと1対1の面談をそれぞれ1~2時間程度行っている。こうした個別面談は卒業までに2~3回行われるが、モニタリングの効果のみならず、学生の性格をよく知ることによって渡航時のトラブル回避やトラブル発生時の冷静な対応を可能にするという狙いもある。

同大学の経済学部での大学院進学者は少ないが、本プログラムの参加者の中からは開発経済学の面白さに目覚めて毎年大学院進学者がいる。また、就職先は、経済学部全体では金融や保険関係が多いが、本プログラムの参加者は教育やメーカーなどが多い。

卒業論文では、一般に二次データを利用して執筆する学生が多いが、本プログラムの参加者は海外を含む現地で実際に調査をし、一次データに基づいて執筆する学生が半分以上である。

本プログラムのカリキュラムマネジメントにかかわる活動については、前身はベトナム・カンボジアでの2~3週間の現地調査であったが、昨今の学生の内向き傾向を踏まえて少しずつ内容を追加し、その成長を確認しつつ現在の形に発展させてきたということがある。

#### 5. 本プログラムに参加しやすくするためのサポートや工夫

卒業必要単位としてアフリカ現地調査4単位、バリ島インターンシップ4単位の計8単位が認定である。

奨学金は、アフリカは航空券だけでも高いが、SGUに採択されたので学内補助金が出ている。その結果、JASSO7万円×3カ月+学部補助金がアフリカ5万円、バリ島3万円支給され併給できる。

また、事前・事後学習を含めた研究活動で夜遅くまで取り組む本プログラムのため、の活動スペースが担当教員に貸与され、学生が活動を続けられるようになっている。

#### 6. 本プログラム参加者の他の海外プログラムへの参加

本プログラムは3年次の7月~9月に実施されるため、その後の長期留学は困難な時期になるが、それでも毎年複数の学生が中期・長期留学に行っている。また、開発学の研究で有名なサセックス大学大学院(イングランド)に2020年度から進学する学生もいる。

## B. 学生インタビュー

### 1. 関西学院大学学生 1（経済学部 3 年）

#### （1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

大学入学以前より、英語は得意な方で、海外旅行にも家族でヨーロッパなどの欧米圏に 4 回渡航した経験がある。高校時代には、自分の通っていた高校に「放課後留学」という制度があり、それに参加していた。英語ネイティブの先生が週 1 回程度やって来て、放課後に英語でコミュニケーションをするという内容であった（英語を使ったゲーム、海外文化の紹介、グループワークなど）。これにより英語で自ら話すということに慣れ、海外留学に行きたいという意欲が高まった。

大学入学後、1 年次の 2 月にカナダでの 1 ヶ月のプログラム「Cross Cultural Workshop」に参加した。このプログラムは、クイーンズ大学（カナダ）の School of English が実施する、4 週間の関西学院大学生のみを対象としたプログラムであった。現地の家庭にホームステイし、英語運用能力とプレゼンテーション能力のスキルアップを中心に、カナダの文化を学んだり、放課後に現地の学生とワークショップをしたりしながら過ごした。英語も聞き取りやすくコミュニケーションにはあまり困らなかった。

2 年生で開発経済学ゼミへの所属が決まり、3 年次に本プログラムに参加することになった。

#### （2）参加した海外プログラム

マダガスカルで 1 ヶ月の調査研究に取り組む「アフリカ研究」と、バリ島（インドネシア）で 1 ヶ半月インターンシップに取り組む「アジア地域の観光開発」との 2 つのテーマに連続で取り組んだ。

「アフリカ研究」では、利他性とネットワークをテーマに、1 ヶ月間、マダガスカルで現地の大学生とペアを組み農村で調査をした。調査は 4 人のグループで 1 つのテーマに取り組むという形である。英語で作成した調査票（全 42 頁）を予めパートナーの学生に送っておいたが、パートナーは調査票全てに目を通して臨んでくれ、最初に会った時には不明な点を熱心に質問して理解しようとしてくれた。農村の調査では、調査票に基づいて、例えば、回答者の年齢、身長、農業生産性（所有する土地の規模、生産量など）、家庭収入、家庭のエンゲル係数、健康管理（手洗い、病院の利用状況、衛生管理など）、ジェンダー問題に関すること（女性配偶者の食事の内容を決める権限など）などについてインタビューした。調査活動については、朝から家庭を 1 件 1 件まわって調査をし、男性配偶者と女性配偶者それぞれに質問しなければならない内容もあったので、例えば朝は出勤前の男性配偶者にインタビューし、日中には女性配偶者にインタビューするという具合に工夫もしながら進めた。インタビューが終わるとグループ所定のエクセルシートに、その日のインタビュー結果を入力していった。

調査の結果から、マダガスカルは島国なので人々に利他性はなく、またネットワークも作

りたがらないと言われてきたが、実は利他性を持っている個人は多いということがわかった。これまで、現地で「コメ生産性向上・流域管理プロジェクト (PAPRIZ (パプリ))」の導入を推進する JICA は、その導入に向けたアプローチを各村の村長に行ってきた。しかし一般の村民には利他性のある個人が多い一方で、村長には利己的な人が多く利潤を身内で独占したがる傾向がある。こうしたことから、パプリ導入のアプローチを利他的かつ新技術導入に積極的でネットワーク作りが好きな一般の村民にしてみても、という政策提言へ結論づけた。

調査終了後、首都アンタナナリヴに戻って 2~3 日でデータを取りまとめて、調査結果を JICA やマダガスカル政府機関に対してプレゼンテーションした。プレゼンテーションの場では、利他的な人にアプローチするのは言葉では簡単だが、村長以外にアプローチすると村で強い権限を持つ村長との関係性が損なわれる恐れがあるので、リスクが高いやり方ではないかとのフィードバックを受けた。

次に「アジア地域の観光開発」では、バリ島 (インドネシア) で、日本人観光客を対象にフリーペーパーを作成している出版社、アピ・マガジンで 1 ヶ月半の期間、インターンシップをした。主な業務内容は、日本語から英語への翻訳、取材、記事作成、校閲などの雑誌編集の仕事で、最後の 2 週間はインターンシップ生だけで 1 つの特集を企画、取材、記事作成の全てのパートを任された。具体的には、日本人観光客を対象としたワンデープログラムとして、現地の観光地を 4 つのエリアに分け、それに基づいて観光客の目的に合わせて観光プランを紹介するというプログラムを企画し実行した。職場は、日本人とインドネシア人が一緒に働いているので、日本の職場とは異なる自由な雰囲気を感じながらも、伝わらないことによる言語の壁も少し感じた。またインターンシップとは別にもう 1 つの取り組むべきこととして、学生主体のビーチクリーンイベントの企画・運営を行なった。バリ島では、雨季になると海にあるゴミが波に流されて漂流するという環境汚染の問題がある。また、他国からの観光客増加に伴うゴミの排出量が、バリ島のゴミ処理能力を上回って適切に処理できていないという現状もある。そこで観光客や一般市民に危機感を持って欲しいということを中心に、ビーチクリーンイベントを行なった。はじめに協賛企業集めに注力し、自分たちで企業を直接訪問したり、電話をかけたりにして 6 社から協賛を得ることができた。広報では、協賛企業に SNS を使ってイベントを PR してもらったり、現地の小学校 3 校で環境授業を行ったりした。結果として当日は、現地の人々を中心に 300 人を超える参加者が集まり (前年は 60 人)、現地メディアも取り上げてくれるほどの大盛況となった。

### (3) 事前・事後学習について

「アフリカ研究」に関する事前学習は、自分を含む 4 人のグループで、まず調査研究するテーマを決めて、そのテーマに関する先行研究を 30-40 本レビューした。例えば、「中級・応用マクロ経済学」「応用ミクロ経済学」などで学んだ知識を前提に、ネットワークや利他性とゲーム理論に関するものなどである。その上で分析担当 2 人と政策提言担当 2 人に手

分けし、調査研究の仮説を立てるなど、論文のある程度の土台まで構築した。例えば、「現地の村民には利他性があったほうがいいのか?」、「利他性があるならばどんな政策が適切か」など、特にこうした要素間の連結と論文のストーリーの構想とに苦勞した。また英語による現地調査の調査票も作成し、現地で通訳として行動を共にするパートナーの学生に、予めそれを送っておいた。

「アフリカ研究」に関する事後学習は、現地調査で得た多くのデータに基づいて論文を執筆し仕上げることであった。約1ヵ月を要した。

#### (4) 成長を感じる点

異文化対応力、語学力、専門的知識、そして課題解決力が身についた。

異文化対応力については、マダガスカルでの生活に何とか順応できたことである。マダガスカルの生活では、電気がない、お湯が出ない、トイレがない、食べたいものが食べられないという生活を送った。電気がないので日が暮れるのと同時に寝て、鶏の鳴き声で起きるような生活であった。しかしこのような生活にも日を追うごとにある程度慣れることができた。同時に、日本は文明が発達しているが、果たしてこうした地域にそのような文明の益をそのまま取り入れることが、彼らにとっていいことなのか、不満がないのであれば、それはそれで幸せなことではないのかという問題意識も生まれた。

語学力については、特に渡航間もない頃は、現地の学生が話すアフリカ英語の聞き取りに苦勞したが、活動の後半にもなると理解できるようになったことが挙げられる。

専門的知識については、マダガスカルでの農業の知識や、女性のエンパワーメントや児童就労などの現地社会が抱える問題に、実際に触れることができ、大学で学んだ知識を現実を通じて理解することができたことが挙げられる。

#### (5) 満足・不満足な点

満足していることは、「アジア地域の観光開発」で、仕事において、与えられた仕事をこなすだけではなく、自分で考えて行動することも必要だと実感できたことである。

満足できなかったことは、金銭面での自己負担の部分が大きかったのも、例えば生活費をもう少し削減できるような仕組みを取り入れてもらいたいと感じたことである。

#### (6) 今後の学修

「アフリカ研究」では、マダガスカルの農村調査において、自分でデータを取って論文を書き上げることの大変さ、面白さ、そして達成感をひしひしと感じることができたので、今後は調査という形で海外プログラムに参加したいと考えている。また来年度は4年生になるので、そのプログラムで取得したデータを用いて卒業論文を執筆したい。卒業論文では教育をテーマとし、心理学のビッグ・ファイブ理論を使って、その認知・非認知能力への影響について研究したいと考えている。



就職活動については、化学系メーカーあるいは日用品メーカーへの就職を希望している。

「アフリカ研究」で、献身的にボランティアに行くだけでは何も届けられないという無力さを感じたことと、単に日本にあるインフラやモノを発展途上国に持ち込んで問題を解決しようとする事への違和感が、こうしたメーカーを希望する理由である。例えば、マラリア薬やコメの生産性を上げられるような農薬など、現地の社会的・経済的・自然的環境に適したモノを、発展途上国に提供できるような仕事をできたらと考えている。

## 2. 関西学院大学学生 2（経済学部 3 年）

### （1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

小中高と、そうしたプログラムはなかった。とくに記憶や印象に残るものはない。留学のことも考えたことがなかった。あえて挙げるなら、海外旅行へは家族や友人と 2 回行ったことがある。英語も得意というわけではなかった。大学入学前のイメージとしても、旅行で海外に行くぐらいでいいかなという程度で、大学の海外プログラムへ参加したいといった気持ちはなかった。

中高生時代は部活（バレーボール部）を 6 年間続けて頑張っていた。キャプテンも務めて大きな目標みたいなものもあった。そうしたものが大学入学後にはなくて、授業も自分で選べるし、部活に入る人も結構少ない。自分も部活に入らず、授業を受けてバイトして遊んでというだけの日々で退屈さを感じていた。そこで何かを変えたくて、2 年次春のゼミ選択では、学部内で一番ハードと言われるゼミに自ら挑戦していこうと考えるようになった。ゼミ説明会で栗田ゼミの紹介を聞き、「これだ！」と思って志望した。周りからも大丈夫かと心配されたが、一度決めたら引くに引けなくなった。1 学年あたり 20 名ほど受け入れるゼミだが、人気があり選抜もあった。ゼミ所属を許可された時は嬉しかった。

### （2）参加した海外プログラム

- ①海外学習活動「アフリカ研究」：マダガスカルの農村調査
- ②タイ・バンコク チュラロンコン大学生との交流会
- ③海外学習活動「アジア地域の観光開発」：インドネシア・バリ島におけるインターシップと各種産業をめぐる調査

※①～③を 3 年次 7 月末～10 月にかけて連続実施（途中帰国なし）

### （3）事前・事後学習について

所属ゼミが決定した 2 年次春学期から 3 年次夏休み前までが、実質的な事前学習期間だったと思う。ゼミでは、毎週金曜日午後～深夜まで、全学年のゼミ生と一緒に「中級開発経済学（4 限）、研究演習 I（5 限）、サブゼミ（午後 7 時半～）」に参加する。ここではテーマ別の班に分かれて、先行研究の資料収集や、フィールドワーク用調査票の立案・検討、

得られた調査データの分析などの幅広い議論を行う。

ゼミは深夜まで続くと決まっているので、大学近くの下宿生宅にみんなで分かれて泊まり込むという生活を送っている。一人だけだと絶対無理だけれど、仲間や先輩がいて団結するので、ハードな活動内容でもがんばれた。また、国内外の調査地でのふるまい方や、現地での安全確保・リスクの軽減策、どんな食べ物を持って行ったほうがいいのか、パスポートの身に着け方などは、ゼミの先輩から折に触れて話がある。行先が違っても似たような活動を経験しているので、一番参考になるのが先輩たちの話だった。海外プログラムに参加が決まって、そこから必要な知識・スキルを獲得するのではなく、海外調査を念頭にほぼ1年かけて必要なトレーニングを積んでいくという感じだ。

帰国後の事後学習もゼミ活動の中に組み込まれている。ゼミ内での週1回の討議をベースに、海外調査のデータをもとに論文にまとめて政策フォーラムなどで発表する。さらに就職活動期をはさみ、4年生の国内調査・卒業論文執筆までが、一貫した組み立てになっている。

#### (4) 成長を感じる点

事前に調べてはいたが、現地で自分の目で見るとやはり貧困というものを実感する。まずは自分ができることを、何が何でもやりとげろ、一日も休まず調査するぞという気持ちをもった。ペアとなるマダガスカルとの学生との相性や英語力のバランス、調査先の農村の人とコミュニケーションも必要だ。調査票に回答してもらうための交渉もある。それがうまくいかなくて調査票の枚数が集まらず、参ってしまった同期もいた。さらに調査が休みの日には収集したデータを整理・分析して、農業省の方などへの報告会準備もある。とにかく忙しく、立ち止まっている暇はない。多くの学生が調査期間中、どこか1日ぐらいいは体調を崩す。メンバーの士気が落ちたような時もあったが、そういう時にこそ自分が頑張る姿を見せて周りを引っ張っていこうという気持ちをもった。プログラム全体を通じて、体調を管理する力や課題解決力、精神的なタフさが鍛えられた。

英語はとくに得意ではなかったが、海外フィールドワークがあると思うとスコアを伸ばすことも頑張れた。

フィールドワークに出てからは、英語だけではない世界に行って、英語が通じない人々がたくさんいる現実を体験した。農村でも農業省でも、一文ごとに英語からマダガスカル語やフランス語への通訳を経る必要があり、直接会話するようなテンポではやりとりできずに間が空く。もどかしさを強く感じた。先生もタイでわざわざ英語が通じないお店に学生たちを行かせる。英語が通じない世界や、英語ができるだけではうまく物事がいかない世界と、私たち学生が知っている世界のギャップを感じさせようとしているなあという意図を感じながら過ごしていた。

開発経済学の知識を、調査や研究発表の場で実践できた。先行研究論文を収集し読みこなすとか、国内外の現場に調査しに行く行動力、論文テーマごとで編成される班での活動を通

じてリーダーシップも身についた。

#### (5) 満足・不満足な点

満足していることは途上国の生活を肌で実感できたことである。

満足できなかったことは2点ある。1つめは、調査対象となったマダガスカルの農村の問題点や課題解決提案はできたが、それが実際の状況変化にまで結びついているのかが分からず、もどかしさを感じたことである。自分が取り組んだ調査は、協力してくれた人々の生活を少しでもよくすることにつながったのだろうか。今後も、自分の思いや考えを実践・実現することができるようなプログラムに参加したい。

2つめは、海外フィールドワークは参加費用がかかるということである。これを何とかしてほしい。渡航費だけでなく生活費まで支援・援助をもらえるとありがたい。私の場合、JASSOからの奨学金や大学からの補助金でまかなえない部分は、両親がほぼすべての費用を負担してくれた。本当にありがたい。感謝している。自分でもアルバイトをして現地で使う生活費はいくらか貯めていた。しかし周りには、参加費用の確保にとっても苦勞している学生もいた。私たちはマダガスカルで貧困やそれに関連する諸問題を調査したわけだけれど、同じゼミ生の中にも、参加したい調査研究のための費用に悩み苦勞する人がいる。費用を確保するためにアルバイトをたくさん入れると、肝心の調査研究や勉強の時間がとれなくなる。JASSOからの奨学金や大学からの補助金は本当にありがたかった。

#### (6) 今後の学修

今、就職活動を始めたところだ。これと絞っているわけではないが、何らかの形で国内外の貧困問題の解消・軽減に貢献できる領域にかかわっていけたらいいなと思っている。また、経済学の知識や調査研究のスキルを活かしたらとも考えている。そして、様々な国で人々の中へ飛び込み、たくさんのデータを集めて提言するタフな調査活動をやり遂げたことを自信に、これからも頑張っていきたい。

### 3. 関西学院大学学生3（経済学部4年）

#### (1) 入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

小学校時代に2年間、親の仕事の関係で、中国で生活した。その際、中国が急速に成長して行くことを肌で感じた。また、高校時代に授業の一環として米国・シアトルに行った際に、大手企業のアメリカ人・日本人の方々の話を聞く機会があり、世界で活躍することに興味を持ちだした。理系志望で受験勉強をしていたが、進学先は理系ではないと考え、関西学院大学経済学部を選んだ。

入学当時から海外留学は希望していたが、語学のクラスメイトが交換留学を目指していることを聞き、刺激となった。交換留学は、自身の英語力不足と申請時期の関係ですぐに行

くことが出来なかったので、1年次終わりの春に、欧州3週間の語学研修に参加した。

その後、ゼミ選びで、海外のことも魅力的であったが、自分の知らないこと、特に開発途上国を学べるとのことで、栗田ゼミを選んだ。ゼミは2年次後期から開始されたが、交換留学への希望も強く、本プログラム（ゼミの「海外学習活動」）の前に行ける交換留学（中国）に、3年次前期に5カ月間参加した。

## （2）参加した海外プログラム

参加した「海外学習活動」は、3年次前期終了時から1カ月のセネガルでの現地大学生と共に、行う調査と JICA セネガル事務所への政策提案や論文作成などからなる「アフリカ研究」と、数日間のバンコック滞在を挟み、それに続く1カ月のバリ島での日本語学校やホテルでのインターンシップと、島を訪れる観光客へのインタビュー調査からなる「アジア地域の観光開発」で構成されている。

3カ国すべてで、現地大学生がサポートについてくれる仕組みになっている。

バリ島のインターンシップを組み込んだ活動では、自分たちだけで、観光に来ている日本人・欧米人・中国人などにアンケートを取るなどで、困ることは多くはなかった。一方、セネガルでの活動は、渡航後の論文提出という大きな課題があり、4～5人でチームを作り、自分たちでテーマを決めて取り組んでいた。4チームあり、漁業・農業・女性の人権問題・労働者問題、を扱った。テーマ決めには、先生は関与しない。自分たちが扱ったのはセネガルの主要産業である漁業における、漁師が直面する不安定で危険な生活に着目して、漁師にとっての保険を考えてみた。

## （3）事前・事後学習について

事前学習としては、「海外学習活動」はゼミ生全員が参加するため、特にこれをしたと言うのは難しい。ゼミ生はほぼ毎日、顔を合わせていて、チームメンバーで英語力もお互いに高めあったりもした。「海外学習活動（アフリカ研究）」に関しては、チーム毎に論文を書くことになる。海外学習活動の半年前から、アフリカに関する研究を調べたりしながら、自分たちのテーマへの焦点の当て方や、現地での調査方法を検討していた。現地の基礎情報収集や研究に関する様々な論文を読みながら準備を行っていた。自分たちのチームは5人であったが、今まで先輩たちが扱っていないテーマへ挑戦しようと、かなりの時間を掛けて考えた。3年次前期は、自分も交換留学期間で中国にいたが、メンバーが、中国・韓国・カナダが各1名と日本の2名とばらばらの場所にいたので、スカイプなどを利用して、業務をお互いでカバーしあいながら準備にあたった。

事後学習としては、海外学習活動が、渡航後の学部の一般的な学習に結びつくことは難しいと思う。ゼミでの活動には、非常に大きな影響があり、論文執筆も含め、繋がりを感じている。

現地での調査や渡航後の論文作成ができる力が自分についていたことに関して、海外学習活

動の事前と事後を通して周りの仲間にも、栗田先生にも本当に感謝している。この様な力がついたのも、ゼミに入った時から“なんだ、これは？”と言うぐらいの課題を出され続けられたことが大きい。2週間に一度、3・4冊の様々な分野の読書課題が出て、1500字の感想文を提出するのが、ゼミに入って今まで、2年半ずっとあった。時々出せない時もあったが、怒ってくれる先生がいたことも、今考えると本当にありがたかった。英語の論文も大量に読んで、自然と英語力が大きく伸びた。

#### (4) 成長を感じる点

事前打ち合わせ時に、チームメンバー5人が4つの国に分かれていて、それぞれ行えることに限りがある時に、情報共有の難しさを感じた。その際、自分には何ができて、何ができないかをチームで共有する大切さを学んだ。日本側のメンバーは、先生の指導も直接受けながら論文準備も進んでいる感じ、自分が足を引っ張っていると思った時期もあったが、その分、交換留学で学んだことを活かそうとの気持ちで、中国での勉強にも力が入った。

今回のアフリカ研究では、課題解決力が伸びたと感じている。それは、出発前に日本でセネガルのことを、十分に調べていったつもりであったが、インターネットや書籍から得られる情報では全然足りなかった。現地学生の通訳を通して、現地の方の調査を行うため、意思疎通が思うようにうまくできない、理解度不足や調査の方向性の違い、そして金銭面などのトラブルなど、想像できないことが沢山発生し、計画していた調査ができなくなるかもしれないとの現実にも直面した。それらを、一つひとつ解決することを行っていった。特に、通訳についてくれた学生とぶつかることが多く、人の入れ替えもあった。自分たちが半年掛かって理解した研究課題や調査設計に関して、たった数日で説明し、理解してもらうには、自分たちの説明力の不足も感じたが、乗り越えられない壁があることも学んだ。

#### (5) 満足・不満足な点

アフリカ研究に取り組めたのは、この栗田ゼミに入れたからこそである。普通の学生ではできない様な貴重な経験をし、将来を考えるきっかけとなったことに、非常に満足している。

満足できなかったことは2つあり、1つめは、自分達が考えた政策を実現するところまでは届かなかったことである。ただし、学生が論文で提案した内容を実現することが容易ではないことは、理解できている。2つめは、調査費用や生活費用など、学生が2カ月以上、途上国で過ごすためには、経済的に厳しい面も多少あった。

#### (6) 今後の学修

海外学習活動は、将来を考えるきっかけにもなった。ひとつの答えではないものに向けて取り組むことの大切さを学んだ。論文を書いて、課題に対する解決策の提案もしたが、結局学生として発表するだけで、実行することが出来なかったことから、次への想いが湧いてきた。就職は課題解決が実行できることを希望し、選択した。海外とかかわる仕事、将来的に

はアフリカの国の開発にかかわれる仕事に繋がればと考えている。

またゼミの中では、自分たちの力で形にできることをしたいとの気持ちで、独自の創作絵本を滞在先に届ける活動を始めた。今後も、この様な自分たちで形にする活動を増やそうといった動きが、ゼミの活動の中で広がっていくと思う。

#### 4. 関西学院大学学生4（経済学部4年）

##### （1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

入学前の海外体験は幼少期の家族での海外旅行しがなく、異文化体験も中学の時のALTと学校で会話した程度だった。海外プログラムは、元々海外に興味があり、また姉がボランティアでカンボジアに行ったのが楽しそうだったので、できたら参加してみたいと思っていた。

##### （2）参加した海外プログラム

短期の海外プログラムに参加することは考えていなかったが、2年生に開発経済ゼミに配属が決まって初めて本プログラムのことを知った。開発経済ゼミでは、他のゼミとは違って特別な経験ができるというので、入る前からハードだとは聞いていたが、卒業までにそんな経験をしてみたいと思って希望した。アフリカは未知の世界で、自分がどれだけ成長できるか試してみたいという気持ちが強かった。

私の年はアフリカ・セネガルに行った。4人1チームでセネガルの農業について現地調査を行った。テーマは「セネガルの農家はマネジメントに関する知識不足から、同じ作物ばかり作るなどの問題が生じている。もっと市場を意識した営農をしてもらうためにはどうしたらいいか」という内容である。

まず、セネガルのティエスという都市に行った。そこで通訳をしてくれるダカール大学の学生と合流し、打ち合わせをした。調査に行く村もそこでグーグルアースで選んだ。4チームが2チームずつに分かれて別々の村に入った。電話はないので事前のアポ取りなどはできない。いきなり村に行くと先生もいない中で、調査をしていいかどうか交渉した。調査期間中の宿泊はずっと村でホームステイしたが、それも交渉して泊めてもらった。私の行った村の規模は50世帯程度で、これはセネガルの標準的な規模。調査では基本的情報をヒアリングした上で、実験をして前後での変化をモニターする。具体的には、村のリーダーに適切な市場価格を伝え、その後、ミーティングしたグループと、していないグループの間にどのような違いが生じるかについて調べた。各チームが2つの村を調査した。その後、集めたデータをもとに、現地のJICA事務所で中間報告をした。

セネガルでの調査が終了後、1日だけタイ・バンコクの国連機関を見学し、インターンシップのバリ島に移動した。私のインターンシップ先は、観光地から離れた場所にあるヌガラ日本語学校だった。2人の関学生と一緒に入ったが、いきなりまったく日本語を知らない20

人程度のクラスに対して日本語を教えることになった。

約 1 カ月半のインターンシップ期間だったが、最初はまったく手ごたえが感じられなかった。どうしたらいいか一緒に行った学生と話をし、授業を参加型に切り替えた。日本料理教室や折り紙教室、日本の歌を一緒に歌うなどのプログラムを取り入れたら、手ごたえが感じられるようになった。

私たちも行く前から、単に言われたことをやればいい、とは思っていなかったし、日本語学校側も私たちがこれをやりたいと提案したら全面協力してくれた。他の仲間がインターンシップをしているバリ島中心部とは離れていたのも、私たちは観光調査には参加できなかった。

### (3) 事前・事後学習について

セネガルの村での調査に向けて、まず研究テーマを決め、そのテーマに沿った内容を調べた。先行研究については、英語論文を 1 人が何 10 本も読んだ。その上で、英語で何 10 ページにもものぼる調査票を作成した。また関連科目として「開発経済学」「中級開発経済学」「実証国際経済学」「中級ミクロ経済学」「インドネシア語」などを履修した。英語は苦手だったが、先生からチームを作ってやりなさいと言われ、ゼミで英語のチームを組み、いついつまでに TOEIC テキストをやるという形で取り組んだ。

事後学習としては、A4 約 30 ページの論文を調査チームで作成した。10 月半ばに帰国して 11 月初頭に論文提出なので、学校に夜遅くまで張り付いて完成させた。

### (4) 成長を感じる点

元々私は対外的に行動的でなかったが、いろいろな国の人に触れる面白さに気づいたし、コミュニケーション力が成長したと感じる。

現地に行くまではネット情報のみだったが、行ってみてリアルにそこにしかない空気に触れ、実際に行って調査することの大切さに気付いた。

現地で協力してくれた人へのお礼もこめて論文を書き、学びへの捉え方も変わった。

### (5) 満足・不満足な点

全く新しい経験、現地の人々との交流、論文執筆を通じた途上国の現状の理解の深化などに満足している。長いようで、あっという間に終わってしまったので、もっと長期でいろいろなことに挑戦したかった。

### (6) 今後の学修

卒論を書く時に、テーマはラオスの中等教育だったが、現地に行って調べなければわからないと思い、ラオスに行って調査をした。さらに卒業直前だが 2 月に先生の助手としてマダガスカルに行くことにしている。

セネガルへ教科書を届けるボランティア活動をしていたので、セネガルでの経験を活かして、途上国の支援や、世界の子供たちに貢献できるような企業に就職することにした。